

第五節 水産業

沖永良部の漁業が本格化したのは大正の初期である。

この時、イトマンと称する沖繩の漁師（与論出身者も含まれていた）が、四隻の組みウバ（板付舟）で四十余人来島し、長浜に四十坪ほどの長屋を造って住みつき漁をしたときからである。

彼らは、和泊と伊延を基地として、大きな海原で、しかも優れた技術で大いに魚をとりまくり、島内を行商した。

これまで、食膳をにぎわす程度にとどまっていた島の人たちの漁も彼らに刺激され、あるいは漁法を習い、従来の鱧突き・イジヤ（すみやき）釣り・万引釣り・いか釣りのみでなく、飛魚・ムロアジ・ヒチ綱漁、いかの誘火漁法なども行うようになった。

漁舟も、沖繩から「ウバ」と称する舟足の早いものや大島から「アイノコ舟」といってウバと島舟の中間的な

ものが導入されるようになった。

しかし、新しいタイプの舟、新しい漁法を学んでも農業の盛んな沖永良部では漁を専業とする者はなく、あくまでも農業の片手間に、あるいは夜間に舟を漕ぎ出して漁するということには変わりはなかった。また、獲れた魚も一部米などと交換することはあったが、干物にして蓄えたり、縁故の者に分け与えたりで、業として販売することは少なかった。